

観測問題と他者介入

—社会科学の方法的省察—

後藤 玲子

〔経済哲学〕

近年、研究者の書くものにも定型的なストーリーが増えた。論理、統計、数学、事例、史実、論拠とするものに違いはあっても、叙述のスタイルは変わらない。書き出しから結びまで、読み手の予想を裏切らない、思考をさへぎること

もない、ひとつながりの物語り。政府刊行の報告書など、書き手から読み手に一方的に流される文書であれば、それでよいのだろう。その目的は真理の探求ではなくて、情報の伝達、広報であり、忙しい読み手に、最小の集中力以上のものを要求してはならないとされるから。

だが、研究書は違う。研究書は、読み手に、書いてある事柄が一考に値するかどうかの判断を迫る、一考に値するのだとしたら、そこでの考察を前に進めるよう要求する。加えて、そこには書かれなかつた論点をみつけるように、また、書かれなかつた論点を自ら展開するよう、読み手を誘う。

つまり、研究書は、本の読み手の方向性と心構え・身構えを、読む前と後でがらりと変えてしまう。本人の思考と関心をこれまでまったく無縁であった世界に向けて開く。いったいそんな本を誰が好き

好んで読もうとするのだろう。そんな本だからこそ、ふいに会ってしまふものなのだ。出会ってしまつた以上は、覚悟して読むしかない。以下では、このような類の研究書を三冊、紹介したい。

筆頭は、ハイゼンベルグ著『現代物理学の自然像』（みすず書房一九八七年）である。一九六〇年代の中ごろ、ハイゼンベルグは、自然科学の方法に関して次のような警鐘を鳴らした。

自然科学はもはや観察者として自然に立ち向かうのではなく、人間と自然の相互作用の一部であることを認める。分離、説明そして整理という科学的方法は、方法が対象をつかむことによって対象を変化させ、変形するということ、それゆえ方法とはや対象から離れえないということによって課される限界を知るに至る。

自分を離れて対象をありのままとらえることが、はたしてできるのだろうか。「観測問題」と呼ばれるこの難問は、社会科学をも呪縛する。社会科学の場合には、まさに、対象が人間であるために、科学もまた人間と人間の相互作用の一部に他ならず、観測することは、ただちに他者介入を意味することになる。的外れの観測は、対象をとらえ損ねるのみならず、対象を深く傷つけかねない。社会科学において観測問題はいつそう深刻である。

このような関心から、学としての社会学を再帰的・自己言及的にとらえる「知識社会学」が生まれた。経済学にこの視点が乏しいのはなぜだろうか。

塩野谷祐一は、例外的に、この課題に精力的に取り組んできた経済学者である。ここではその到達点ともいえる『ロマン主義の経済思想——芸術・倫理・歴史——』（東京大学出版会、二〇一二年）を取り上げよう。

ロマン主義はしばしば、理性に對して感情を、普遍性・画一性に對して多様性・個性を重視する点で、啓蒙主義と對置される。それに対して、塩野谷は、ロマン主義を、「啓蒙と反啓蒙を融和させ」る「根源的な『生のパラダイム』」と再定義する。本書の企図は、経済学の理論枠組みをもとに、ロマン主義の方法的特質を解析し、後者をもとに、経済学的方法的拡張を図つたことにある。

塩野谷によれば、『科学』は、すでに一定のパラダイムを持った『科学世界』において、特定の問題と方法に従った謎解きの活動に収れんされてしまった。科学としての経済学的方法的性質は、

「歴史の捨象」「対象の構成要素への分析・還元」、過度の抽象化・数量化を特質とする。それに対して、ロマン主義の特質は、「知識の歴史性と多元性」、個別性・特殊性を含んだ「対象の全体論的把握」にある。

ロマン主義的方法が、経済学の方法的枠組みを大きく拡張することとは間違いない。次の一文はそのひとつの証左である。

社会科学においては、社会現象の「観察者」は同時に社会現象の担い手としての「行為者」である。

「観察者」と「行為者」との一体性は、ハイデガーが「現存在」と名づけたように、自分自身の理解と対象の理解とが一体性を持つことを意味する。人間のみが、存在するものもろの事象の「意味・価値・意義」を設定することができ。経済学の主題を決め、経済学のあり方を考えることは、他人事ではなく、めいめいの人間の生活態度の問題である(二九六ページ)。

驚くべきことに、塩野谷は、ハイゼンベルグの観測問題をやすやすと解いてしまっている。社会科学においては「観察者」と「行為者」は一体性を持ちうるのだと。

注意すべきは、塩野谷は、観察者

と行為者を、「生活」概念等を媒介として、自明の恒等式とみなしているわけではない点である。

例えば、日本における餓死事件を分析しよう。ここで、観察者が、生活保護を受けたらおしまいだという自分自身の直観と日本人の平均像をもとに分析を進めるとしたら、個別性・特殊性を含む「対象の全体論的把握」の道は閉ざされる。観察者の直観は、たとえ同業者にはすんなり受け入れられるとしても、餓死に至った当事者に通用する保証はない。

こういった困難さを、塩野谷が見逃しているわけではない。むしろ、困難さを知りつつも、それらを学問の射程外にすることによって済ませてしまった点に、これまでの経済学パラダイムの限界をみる。代わりに、塩野谷が提示する方法が、「ロマン的ポエジー」とロマン的イロニー」「修辞と思想としてのレトリック」である。

これらの方法の要点は詩的想像力と批判的反省力にある。観察者が対象を照射する鏡と、観察者が対象から逆照射される鏡を、いわば合わせ鏡としながら、行為者の「全幅的な人間精神の多元性」に接近する。この方法は、とりわけ、

現実の問題を発見し、解法を見立てるうえで有益な「プレ理論」の創出に有効である、と塩野谷は指摘する。

同書の関心は、「潜在能力アプローチ」を提唱したアマルティア・センの関心と見事に呼応する。「潜在能力アプローチ」は、これまで経済学で標準的にとられていた資源アプローチや効用アプローチを越えて、本人が実際にどんなことができるか、どんな状態でありえているのかという、個々人が享受している自由の価値に接近する手法である。

その射程は、既存の経済学はもとより、ジョン・ロールズに代表される現代の正義理論を超える可能性をもっている。ただし、その実践的適用を図ることはむしろ難しい。ともすると観察者の視点から行為者の潜在能力を一方向的に同定し、定量的操作と分析に邁進しかねない。個々の行為者にとって真に有益となるかたちで潜在能力アプローチを適用するためには、それをリードする「プレ理論」が必要となる。ここで参照される書のひとつが、宮地尚子著『環状島Ⅱ トラウマの地政学』(みすず書房、二〇〇七年)である。

精神科医としてDV被害者の治療に関わってきた宮地は、人間はかくも残酷になりうるものなのかと、いく度も被害者の話に打ちのめされながら、また、ときに自ら二次トラウマに陥る淵へと落ち込みながら、被害者の生を支援し続ける。宮地のユニークさは、特に、苦悩を語ることなく亡くなっていた死者の被害の全貌をとらえようという試みに現れる。

死者は究極の犠牲者である。死者の被害と苦悩をとらえないことには、被害者の生に対して真に適切な支援もおぼつかない。これが宮地の信念である。だが、いったいどうやったらとらえられるのか。ここで登場するのが本のタイトルともなっている「環状島」である。これは死者も含めた被害の全貌をとらえるために宮地が構想した「プレ理論」に他ならない。

いつでも逃げることできる自らの立ち位置に悩みながらも、宮地がひるまない理由は明快である。ひるんだら加害を隠べいしようとする加害者の思うつぼだから。観測問題を踏まえた社会科学的方法的革新のヒントは、優れた他者介入の実践にある。

(ことう れいこ／一橋大学教授)